

2024年度  
入学試験問題

国語

2月11日

受験番号	氏名

中村高等学校



問題は次のページからです。

一 次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書きな

さい。

(1) 融通のきかない人。

(2) いろいろと便宜を図る。

(3) 革で装丁された本。

(4) 優しい眼差し。

(5) 緩いカーブをえがく山道。

二 次の各文の——を付けたカタカナの部分に当たる

漢字を楷書で書きなさい。

(1) 来客をカngeイする。

(2) 重いセキムを果たす。

(3) 市場はカンサンとしていた。

(4) アルバイトをやトウ。

(5) イチジルしい技術の進歩。

三 次の1～5の俳諧には、それぞれ一つずつ歴史的仮

名遣いで書かれた語がある。それぞれ抜き出し、現代  
仮名遣いに直して平仮名で書きなさい。

1. ぎやうずいの 捨てどころなき 虫の声

(上島鬼貫)

2. しづかさや 岩にしみ入る 蟬の声

(松尾芭蕉)

3. 越後屋に 絹さく音や ころもがへ

(榎本其角)

4. うれひつつ 岡にのぼれば 花いばら

(与謝蕪村)

5. やれ打つな はへが手をすり 足をす

(小林一茶)

【四】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)  
\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

ある県の国立大学付属小学校で、五年生の道徳の研究発表を見学したことがあります。公開授業だったので、廊下

にまで見学者があふれ、教室は熱気に包まれていました。授業の目当ては「誰に対しても礼儀正しく接する態度を養う」というもので、子どもたちがどんな思いを込めてあいさつをしているのかを考えながら、普段のあいさつ活動につなげていくのが目標となっていました。

初めに児童があいさつについて、日常的に感じている気持ちを発表しました。「恥ずかしい」「あいさつされても返した方がいいかどうか迷う」「仲のよくない人にはしない」……。ほとんどの子どもたちが、あいさつに苦手意識を持っている様子がかげえました。

担当の教諭は、次に動画を子どもたちに見せました。内容は小学校の近くにある高校の野球部の生徒たちが、校外をランニングする際に、道行く人に大きな声であいさつをする模様を撮影したものでした。映像を見た児童

15

10

からは「高校生の様子はさわやかで気持ちよかった」「元気がよくて、あいさつをされた人も返したくなると思う」と  
[1] 的な声上がる一方で、「大きな声を出しても、あいさつを返してくれなかったら暗い気持ちになりそう」「恥ずかしいし、自分にはできそうもない気がする」と  
いったやや [2] 的な意見もありました。

感想を受けて、教諭は子どもたちに尋ねました。「野球部員の心の中にも、あいさつしたくないというマイナスの気持ちはあったと思う。それなのに、どうしてあいさつができたんだろう」。しかし、この質問はどうやら子どもたちには少し難しかったようです。さきほどまでのように、活発には手が挙がらなくなりました。すると、特定の数人の児童だけが発言を始めました。「もしあいさつを返してもらえなくても、自分も相手も気持ちよくなるから、乗り越えられるんだと思う」「相手を元気にしたいと思ってあいさつをしているから、自分も元気をもらえるんだと思う」。

立派な意見に聞こえますが、子どもの発言なのにどこか借り物というか、ぎこちない感じがしませんか。クラスでは優等生の子どもたちなのでしょうが、私にはとて

35

30

25

20

も本心から出てきた言葉とは思いませんでした。「そうですね。みなさんが相手を元気にしたいという気持ちでいさつをすると、自分も相手も元気になれますね」。笑顔で応じてしまう教諭にも、違和感を覚えずにはいられませんでした。しかし、そう感じているのは私だけだったようで、参観に来ている保護者や教員の多くは授業の展開に満足しているのか、大きくうなずきながら見守っていました。

授業中、私は紹介された映像についてずっと考えていました。この部員たちはユニホームを脱いだ時にも同じようにあいさつをするのだろうか。うが<sup>A</sup>つた見方をすれば、これは野球部の存在を広く知ってもらって、地域にファンを増やすためのアピール活動ではないのか。映像では、通りすがりの人は気さくにあいさつを返しているように見えたけど、本当は嫌なのに仕方なく応じた人もいたのではないか。うーん、ちよつとひねくれすぎえますか。

そんな時でした。後方に座っていた一人の男の子が「あんなに大きな声で、あいさつをされなくなかった人もいたんじゃないかな」と小さな声でつぶやきました。まさ

に私の感覚にピタリと当てはまる発言でしたが、声が小さすぎたのか、教諭はほとんど取り合うことをしませんでした。彼はきつとこう言いたかったのではないでしょうか。「人にはそつととしておいてほしい時もあるし、

※

」と。で

も、この男子児童の心の中に生じた小さな疑問を、教室の仲間が共有することはありませんでした。

教諭の耳に届いていたのか、いなかったのか、今となっては分かりませんが、テーマ設定からいって、男子児童の疑問は十分に想定できたはずであり、聞き逃してはならない声でした。「なぜあいさつをするのか」という本質を突き詰めて考える授業であったなら、教諭の側から提起してもよい考え方だったと思うのです。

授業での発問を聞いてみると、教諭は「あいさつを返してもらえなかった時に「負の感情」にどう向き合えばよいか、考えを深めたい」という意向を持っていて、道徳に真剣に取り組む姿勢のある先生だと感じました。心の中に生じる負の感情に向き合うという趣旨には、大いに賛同します。ただ、「迷いはあったけど、野球部員たちは克服することができた」という結論を導きたいあまり、

肝心の負の感情をめぐる子どもたちとのやり取りが、中途半端になってしまったのは残念でした。

その後も「優等生たち」の拳手は続きました。「人に元

気や笑顔を与えたいから、僕はあいさつをします」という発言にいたっては、どこかのアイドルの台詞を聞いているようで、めまいがしそうになりました。こんな建前を繰り返し言わせるぐらいなら、「みんなはどう思うか分から

ないけど、あいさつは大切だし、決まりだからちゃんとやりなさい」と規範意識として教え込む方が、よほどすつきりします。話し合いという民主的な衣をまとい

ながら、教員の思い描いた価値を注入するやり方には、大いに疑問を感じます。まるで子どもたち自身が結論を導いたかのように装い、納得させようとする手法は姑息です。

私はこれまでに取材で百校以上の学校を訪れてきました。人にはそれぞれ個性があるように、学校にも一校一校に個性があります。初めて訪れる時には「どんな雰囲気

の学校だろう」とわくわくしながら校門をくぐります。校庭の横を通り過ぎて校舎に入り、職員室の入口にたどり着くまでに、何人かの子どもたちと言葉を交わすこと

ができれば、その学校の雰囲気は何となくつかめます。

学校の個性を構成する要素の一つは、子どもたちのあいさつの仕方や、見知らぬ大人への接し方にあると感じているからです。

ある小学校では校庭で遊んでいた約二十人の児童全員が、歩いてきた私に向かって、立ち止まってあいさつを

してくれました。せつかくの休み時間だったので、ボール遊びをする手を止めてまで、こちらに気を配ってくれる子もいて、うれしいというよりも少し申し訳ない気分になりました。校長室に通されると、パリツとした

スーツに身を包んだ校長先生が待っていました。何かを期待されているような気がしたので「きちんとあいさつのできるいい子どもたちですね」と水を向けると、「そう

でしょう。うちはいいさつ運動に力を入れていて、教育委員会からも地域で一番あいさつのできる学校として高く評価されているんですよ」と満面の笑みです。

総合学習の具体的な教育実践を聞きたくて訪れたのですが、校長が語るのは、学力テストの結果が良好だとか、過去に学校が表彰されたといった話ばかり。担当の先生に取材する時にも、自ら割って入ってきて解説を始めて

しまう有りさまです。現在の学校のシステムでは、校長の権限はとても大きいものがあります。どこの学校に行っても校長の人となりが学校全体の雰囲気大きく影響します<sup>③</sup>。子どもたちが遊ぶ手を止めてまで、なぜ私に会いさつをしてくれたのか、分かるような気がしました。

120

一方で、あいさつに I だなあと感じる小学校もありました。廊下を歩いてみると、あいさつをしてくる子もいれば、友達との会話に夢中だったり、何か考えごとをしていたりして、そのまま通り過ぎていく子もいます。一人の女の子が私のシャツの袖をつかんできて言いました。まだ一年生か二年生になったばかりでしょうか。「何しに来たの。ねえ、どこ行くの、一緒に遊ぶ?」。

125

自分の知りたいことを II に尋ねてくるだけで、「こんにちには」のひと言はありません。でも、私はまったく嫌な気分にはなりません。考えごとをしていて、大人の存在に気づかずに通り過ぎてしまう上級生がいることも、遊びに夢中になっている下級生がいることも、子どもならごく普通だと思っからです。見知らぬ部外者には注意を払い、ちゃんと関心を持って話しかけてくる児童がいるあたりは、逆にたいしたものではありません

135

130

か。

そういう学校の校長先生は、目を凝らして子どもたちの姿をとでもよく見えています。「うちの子どもたち、ちゃんとあいさつができなくて、失礼がなかつたですか。いつも言い聞かせているんですけど、すみませんねえ。でも、うちの子たちにはこんないいところがありません。ね……。」といった感じで、子どもたち自慢が始まります。

140

<sup>④</sup> 学校要覧に書かれているようなお決まりの紹介ではなく、児童を一人一人の固有名詞で語るができます。教育委員会に表彰された話はなくても、子どもたちに温かいまなざしを向ける教員集団が確かに存在していることが、言葉の端々から伝わってきます。

145

かつては多くの学校がそうだったと記憶していますが、最近ではかなり少数派になってしまいました。現在の学校現場には保護者や地域住民、教育委員会や地方議会などから多様で、中には理不尽とも言える要望が数多く寄せられます。先生は忙しくてすべてに対応することができず、学校は苦境に立たされています。それでも、目の前の子どもたちに真剣に向き合っている先生は、いつの時代にもいるのです。そんな学校や先生に出会えること

155

150

があるから、自分は教育の取材を続けているのかもしれないと思う時があります。

誤解があるといけないので付け加えておきますが、私はいさつの必要性はきちんと教えるべきだと考えています。少年野球の手伝いをするところがあるのですが、子どもたちにはいさつをするようしつこく言いますし、いさつの意味を考えさせるようにしています。スポーツは自分一人でも、自分たちのチームだけでも成立しません。個人競技でも同じことです。監督やコーチ、対戦相手やグラウンドへの感謝の気持ちがあれば、自然といさつの言葉は出てくるはずですよ。

いさつをきちんとしている学校が、形式的だと言いたいわけでもありません。しかし「褒められるから」とか「怒られるから」といった自分の外側の評価軸に従って子どもたちが行動しているだけだとしたら、「君たちは大人にとって都合のよい子どもになっているだけかもしれないよ」とささやいておきたいのです。

(名古屋隆彦『質問する、問い返す

——主体的に学ぶということ』岩波書店)

170

165

160

問一

1

2

には対義語が入ります。ここでの内容にふさわしいものを答えなさい。

問二

線AとCの語句のここでの意味を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A ア、良心的な解釈をした見方

イ、常識をわきまえない見方

ウ、見当はずれで恥ずかしい見方

エ、隠れた意図に触れる見方

B ア、表向きの意見や考え

イ、借り物の意見や考え

ウ、芝居がかった言い方

エ、背伸びをした言い方

C ア、日頃の労をねぎらうように言う

イ、歓心を買うためにお世辞を言う

ウ、関心をそちらに誘導するよう言う

エ、機嫌の良さをよそおって言う

問三

※ に入れるのに適切な言葉を次から選び、

記号で答えなさい。

ア、見ず知らずの人とあいさつを交わすことに対して

恐れる気持ちはよくわかる

イ、本当に相手のことを考えたあいさつは、必ずしも

大きな声でなくてもいい

ウ、いつもは元気にあいさつをする野球部員も、ユニ

ホームを脱げばきつとしない

エ、相手をよく見て、声の高さや大きさを変えてあい

さつをするのが大事だ

問五

線②・③とありますが、この学校の子ども

たちが筆者に対してこのように振る舞った理由を、

筆者はどのように考えているでしょうか。次の文の

空欄に、指定した字数でこれより後の本文中から言

葉を抜き出して入れなさい。

遊びの手を止めてまで挨拶してくる子どもたち  
を見て筆者は、子どもたちが 十三字  
 しているのではないかと考えている。  
行動

問六

I・II に入る「無」のつく言葉の組み合わせ

わせとして適切なものを次から選び、記号で答えな

さい。

ア、I 無関心 II 無意味

イ、I 無計画 II 無意識

ウ、I 無鉄砲 II 無表情

エ、I 無頓着 II 無邪気

問四

線①とありますが、ここで「教員」が「注

入」しようとしているものは何ですか。それを示

す一続きの言葉を本文中より三十五字以内で抜き

出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問七

——線④はどういうことを言おうとしたもので  
すか。それについて説明をした次の文の空欄に入る  
言葉を指定した字数で本文中からそれぞれ抜き出し  
て入れなさい。

校長先生はじめ先生方が子ども達にいつも			
1 (十字)	ており、	2 (十八字)	い
るため、児童を総体としてではなく一人一人個別に 語ることができる、ということ。			

問八

この文章を読んだあなたがもし小学校の校長先生に  
なつて全校児童に「あいさつ」の話をすることに  
なつたとしたら、どのような話をしますか。二百字以  
内で書きなさい。なお、書き出しや改行の際の空欄、  
、や。や 「などもそれぞれ字数に数えなさい。

【五】

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

高校を中退した十七歳の篤は、相撲ファンの叔父の勧めで朝霧部屋に呼出見習いとして入門した。篤と同年ながら二年早く角界入りした部屋違いの直之さんや父親ぐらいの年齢の進さんとといった兄弟子達、同じ朝霧部屋の力士達に支えられながら、稽古と本場所を繰り返す日々を送っている。

秋場所の二日目も、朝早くから出勤することに変わりはなかった。平日であるぶん、昨日より朝の客入りは少ない。しかし例によつて今日も、篤は序ノ口力士の四股名を呼び上げなければならぬ。

取組の始まりを告げる拍子木が鳴った。二日目だから今日は西方から呼び上げるんだなと確認する。まだ、ここまでではよかつた。

にいいいーにいいいーのおおーもおおーとおおー

5

そう呼び上げたとき、ざわめきがはつきり聞こえた。何だろうと訝Aいぶかつたときにちらりと力士の表情が見え、ようやく篤は自分の失敗に気づいた。力士はぎよつとした顔で篤を見ていた。

四股名を間違えたのだ。

一瞬にして血の気が引き、慌てて手持ちで正しい四股名を確認する。1 一行見落としていて、次に相

撲を取る力士の四股名を呼んでしまつていたようだ。白扇を持つた右手には、汗が滲みだしていた。土俵下で控えている親方や力士、遠くから土俵を見つめる、兄弟子の呼出たちに目を向けるのが怖い。

篤は西方に体を向けたまま、改めて声を発する。

にいいいーにいいいー あわのおおーしいいまあああー

それから何事もなかったかのように東方に向き直り、四股名を呼び上げた。

土俵周りを箒で掃き整えたが、2 初めて土俵に上がった先場所の初日と同じくらい、ぎこちない動きをしていたはずだ。

円の上を一周し土俵を下りたところで、ある審判の親

25

20

15

10

方に呼びとめられた。

「お前、何してくれてんだ」

眼光の鋭い親方なので、小声で注意しても威圧感があった。観客に聞こえないように、篤もIの鳴くような声ですみませんと謝罪する。親方の名前は出てこないが、このほんの数秒のやり取りで、心臓がすっかり縮んでしまった。

四股名を間違えられた力士は引き落として勝つたものの、複雑そうな顔をして下がっていった。それを見て、悪かったと心の中で詫<sup>わ</sup>びる。

なんとか最後の一番まで呼び上げを行うと、審判部の親方全員に頭を下げた謝った。

花道を下がっていく途中、3 手持ちをちゃんと見なかったのかと後悔の念が込み上げてきた。ぐつと奥歯を噛みしめ、売店横にある自販機に向かう。息苦しいほど、喉が渴いていた。

《 中略 》

その後は、朝霧部屋ちゃんこ番の二人が揃って負けた

30

35

40

45

ことと、いつものように直之さんが声援を受けていたことしか覚えていない。飛ぶような早さで取組が過ぎていった。つた。

全取組と明日の準備が終わり、控室で帰り支度をしていたところに、篤より四、五歳ほど年上と思しきスーツ姿の呼出が近づいてきた。

「お前、今日別の力士の四股名呼んでたな。普通、そこ間違えるか？ やる気あんの？」

そう篤に声をかける顔には、冷ややかな笑みが浮かんでいた。

「答えられないってことはやる気ないんだな。だったら辞めれば？ 明日もバカみたいな失敗されたら迷惑だもんな」

兄弟子は続けて言った。その口角が鋭く持ち上がった。これは、※ の顔だ。

瞬時に悟り、背筋が冷たくなる。何か言わなければと思っただけでも、舌がもつれたように動かない。するとそこへ、進さんが割って入ってきた。

「光太郎、そんなこと言うな。こいつはまだ二場所目なんだから。失敗することだってあるさ」

50

55

60

65

そうやって、篤の肩に手を置く。

70

「お前だつて、新弟子の頃はしよつちゆう声裏返つてた  
だろ」

進さんにまつすぐ見つめられ、光太郎と呼ばれた兄弟  
子はふんと鼻を鳴らして、そそくさと部屋を出て行った。  
進さんの手が肩から離れる。

75

「すみません。進さん、ありがとうございます」

頭を下げたが、みつともない失敗をしてしまったのに  
フオーしてもらつた申し訳なさで、目を見ることがで  
きなかった。

80

「いいんだよ。あいつは昔から困つた奴なんだ。お前は  
何も気にするな」

同じ呼出でも、さきほどの兄弟子とはほとんど口を利  
いたことがなかった。接点は少なくとも、場所中は毎日  
顔を合わせる人だと思つと、ひどく気分が塞いだ。

85

「でも、本当に四股名間違えないようにしろよ。今日は  
間違えられた奴が勝つたからまだよかつたけれど、下手  
したら力士が相撲に集中できなくなるからな」

① 声のトーンを一段下げ注意されたところで、やっとま  
ともに進さんの顔を見ることができた。目尻にはしっか

り皺しわが刻まれていて、進さんが自分の父親より年上だつ  
たことを思い出す。

90

この人くらいの年齢まで、俺は呼出を続けられるだろ  
うか。

ふたたび、篤は自分に問いかける。続けられる自信な  
んで、まだない。答えは簡単にはじき出された。それで  
も進さんのでのひらは温かかった。

95

返事をしたところで、直之さんが控室に入つてきた。  
最初はお疲れさまですと大きな声で挨拶して入つてきた  
が、向かい合う進さんと篤を見てからは、なぜか黙つて  
帰り支度を始めた。

100

朝霧部屋の玄関の扉に手をかけた瞬間、今日の献立は  
カレーライスだとわかつた。相撲部屋の食事は、いつも  
鍋というわけではない。醤油ちゃんこも好きだけれど、  
ほどよい辛さで、具がごろごろ入っているカレーは、篤  
の一番の好物だ。

105

「やっと帰つたか。お前、今日ミスつて審判の親方に叱  
られて泣いてたつてな」

ただいま戻りましたとちゃんこ場の戸を開けた途端、  
小早川さんの声が飛んできたので少しひるむ。泣いてい

たというのは事実無根だが、相変わらず小早川さんは手  
巖しい。

110

「別に、お前が好きだからカレーにしたわけじゃないか  
らな。昨日のうちからカレーって決まっていたし、慰めよ  
うとか、全然そんなつもりはねえぞ。勘違いすんなよ」

115

そう言いつつも小早川さんはカレーを多めにすくい、  
皿に盛ってくれた。篤も、それをありがたく受け取った。

カレーを食べ終え、食器を洗っていると師匠が帰って  
きた。師匠が帰ったときは、足音でわかる。部屋の誰よ  
り、重々しい音を響かせて歩くからだ。この足音が聞こ  
えるといつも、部屋は一瞬で緊張した空気になる。

120

「おい、帰ったぞ」

師匠がちゃんこ場に入ってくると、ゲームをしていた  
兄弟子たちは立ち上がって、お疲れさんでございまして  
頭を下げた。篤も皿を洗う手を止めて、師匠に挨拶をす  
る。師匠は大股でずんずん突き進み、篤の前で足を止め  
た。

125

「篤、ちよつと上に来い」

上、とは三階にある師匠の自室のことだ。朝霧部屋で  
は、三階で師匠とおかみさんが暮らしている。師匠の自

室には過去に一度、呼ばれたことがある。宮川さんと柏  
木さんに連れられ渋谷へ遊びに行き、門限を破ってしま  
ったのだ。前は説教で呼び出されたので、今日も叱ら  
れるのだろう。ひやひやしなうながら行くと、案の定、「お前、  
今日みたいにも四股名間違えるんじゃないぞ。気を抜くか  
らああいうことになるんだ」と叱られた。

135

はい。すみません。

今朝審判部に注意されたときのように、師匠に向かっ  
て頭を下げる。

「顔上げろ」

言われた通り顔を上げると、「心技体<sup>C</sup>」と書かれた書が  
見えた。同じものが稽古場の上がり座敷にも飾ってある  
が、師匠の知り合いの書道家の作品らしい。

140

「心技体」の文字を篤が目にしたことがわかってい  
るか、師匠は「力士は、心技体揃ってようやく一人前と言  
われるが、技でも体でもなく、心が一番大事なんだ。心  
を強く持っていないければ、技も身につかないし、丈夫な  
体も出来上がらない」と話を続けた。

145

突然話題が変わったことに戸惑いつつ、はいと頷く。  
「呼出のお前には心技体の体はまあ、そんなに関係ない

けれど、それでも心が大事つてのは力士と変わんねえぞ。自分の仕事をしつかりやろうと思わなければ、いつまでたつても半人前のままだ。お前だつて、できないことを叱られ続けるのは嫌だろう」

はいと弱々しく返事をする、師匠は語気を強めて篤に言い聞かせた。

②「だつたら、自分がどうすべきかちやんと考えろ」

黒々とした大銀杏おおいちようが結わえられていた現役時代に比べ、今の師匠は髪の毛がずいぶん薄い。加齢で顔の皮膚もたるんでいる。しかし、いつぞやインターネットで見た若かりし頃の写真と同様に、<sup>③</sup>師匠の目には人を黙らせるほどの強い光があつた。

何度目かのはい、という返事を口にすると、師匠の話が終わつた。

師匠の自室を出て、一階まで降りると、篤は廊下の一番奥にある物置へ向かつた。念のため、周りに誰もいないのを確認する。

扉を閉めると、何も持っていない右手を胸の前にかざした。

ひがほしいー はああたああのおおー…

150

…  
にいいいいいいー…

(鈴村ふみ『櫓太鼓がきこえる』集英社)

170

問一

線A・Bの言葉の言い換えとして適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A ア、不審に思った

イ、不快に思った

ウ、不服に思った

エ、不当に思った

B ア、落胆し

イ、観念し

ウ、卒倒し

エ、動転し

問二

1

く

3

に入る言葉を次からそれ

ぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、どうして

イ、もつと

ウ、おそらく

エ、どうやら

問五

——線①とありますが、進さんがこのように「注意」した理由として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、四股名を呼び間違えた篤に対し、本当は光太郎と同じくらい怒っていたため。

イ、いつも高飛車な態度に出る光太郎への怒りを、勢い余って篤に向けてしまったため。

ウ、大切な場面で間違えてしまう篤のことを、以前から内心あきれて見ていたため。

エ、篤が今後同じ間違いをしないよう、伝えたい大事なことを強く印象に残すため。

問三

I

に入る適切な漢字一文字を答えなさい。

問四

※

に入る適切な言葉を次から選び、記号で

答えなさい。

ア、自分の力に自信を持っている人

イ、誰かを嘲るのを楽しんでいる人

ウ、大事なことを伝えようとする人

エ、相手に取って代わろうとする人

問六

——線Cと異なる構造の三字熟語を選び、記号で答えなさい。

ア、衣食住

イ、真善美

ウ、有頂天

エ、雪月花

問七 ——— 線②とありますが、師匠は篤がどうすべき  
だと考えているか、四十字以内で答えなさい。

問八 ——— 線③とありますが、この時の師匠の様子に  
ついて適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、加齢によつて、活躍していた現役時代と比べて見  
た目も気力も衰えているが、灯火が最後の輝きを  
見せるように、目には明るさがある。

イ、師匠の風貌は老いを感じさせるものになつては  
いるが、相撲を大事にする気概は全く衰えておら  
ず、瞳には威厳がたたえられている。

ウ、語気を強めて弟子を叱つたことにより、体力的に  
も精神的にも疲れを感じているが、それを弟子に  
は気づかれまいと強い視線を送っている。

エ、部屋の誰よりも重々しい足音を響かせる師匠が本  
気で弟子を叱る時は、活躍していた現役時代さな  
がらに戦う意思が全身にみなぎる。